全集 35

ロマン・ロラン

ジャン・クリストフ

II

片山敏彦 訳

河出書房

世界文学全集 35　ロマン・ロラン II

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和35年 6 月10日　初版発行
昭和44年 8 月 1 日　27版発行

定価　430円

訳　　者　片山敏彦
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　草刈龍平
装　　幀　原　弘

印　刷・中央精版印刷株式会社
製　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

ジャン・クリストフ　Ⅱ

四　反　抗（つづき）

Ⅲ　脱　却……五

五　広場の市

著者とその影との対話……一一

Ⅰ……一一七

Ⅱ……二〇七

六　アントワネット……三一九

七家の中

第一部……四三七
第二部……四九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ジャン・クリストフ

I

主要人物

ジャン・クリストフ　幼い時から音楽を愛し、不屈の精神をもったこの物語の主人公。

シュルツ老人　クリストフの音楽を愛している大学教授。

モデスタ　クリストフの叔父のゴットフリートに救われた盲目の田舎娘。

ロールヒェン　勝気な農家の娘。クリストフの女友だち。

シルヴァン・コーン（ハミルトン）　クリストフの幼な友だち。パリで社交界の流行児となっている。

ダニエル・ヘヒト　音楽出版社の支配人。ユダヤ人。

テオフィール・グジャール　パリの音楽評論家。

コレット　クリストフのピアノの弟子。富裕な実業家の娘。グラチアのいとこ。

リュシアン・レヴィクール　懐疑的な金持ちの文学青年。

アシル・ルッサン　サロンに出入りする社会主義の代議士。

シドニー　クリストフの隣室の親切な召使い娘。

ジャンナン家　フランス中部の旧家。信望ある銀行家。

アントワネット　ジャンナン家の娘。両親の不運の死と没落の後、健気に弟を養育する。

オリヴィエ　アントワネットの弟。のちクリストフの親友となり、フランスの真精神へクリストフをみちびく。
ボワイエ夫人　ジャンナン夫人の冷淡な姉。
ナタン夫人　アントワネットに同情する富裕な社交界夫人。
グリューネバウム家　尊大で非人情な、ドイツの上流家庭。
アルノー夫人　善良でもの静かな教授夫人。夫妻ともに音楽や書物を愛し、クリストフのよき友人となる。
タデー・モーク　クリストフとオリヴィエに助力する親切なユダヤ人。
アルセーヌ・ガマーシュ　傲慢不遜なパリの大新聞の主筆。
エルスベルジェ兄弟、ワトレ氏、コルネイユ神父、シャブラン少佐、セリーヌ、ヴェイユ夫妻、ジェルマン夫人　いずれもクリストフと同じアパートに住む人々。
ジャックリーヌ・ランジェー　富裕な社交界の娘。両親の反対を押しきってオリヴィエと結婚する。
マルト叔母　ジャックリーヌによい感化をあたえた老婦人。
セシール・フルーリー（フィロメール）　若い音楽家。のちオリヴィエの赤ん坊の養母となる。
フランソワーズ　有名な悲劇女優。友情からクリストフと結ばれる個性的な女性。
グラチア　かつてクリストフのピアノの弟子であったイタリー女性。美しい外交官夫人としてふたたび現われる。

四　反　抗（つづき）

Ⅲ　脱　却

クリストフは孤独になってしまった。友だちがひとりもなくなってしまった。以前には困難のときどきに力をかして来てくれた人、そして今この瞬間にたいそうその助力を欲しかった親愛なゴットフリート叔父は数か月前から町にいなかった。そしてもう今度は永久に去ってしまっていた。去年の夏のある晩、遠い一つの村から来た、ぶきっちょな字の手紙はルイーザに告げた――彼女の兄ゴットフリートは健康をそこなっていたにもかかわらず、やはりがんばって続けていた行商の旅の途中で亡くなったことを。彼は亡くなったその土地の墓地に葬られた。クリストフをささえてくれることができたであろう男らしく清澄な、最後に残っていた友情が深淵の中に沈んで行ってしまった。彼はもう年老いていて、彼の思想には無関心な――彼を愛することだけができて、彼を理解することはできない母とふたりだけになってしまった。彼を取り囲んでいるのはかぎりもないドイツの平野、どんよりとしたひろがりの大洋である。それから脱却しようと努力するごとにますます深く埋没する。敵意のある町は彼がおぼれるのを見物していた……

身をもがいていたとき、やみの中のいなずまみたいな光の中に、クリストフの心に見えて来たのはハスラーのおもかげであった。それは、彼が子供のときにあんなにも愛した偉大な音楽家であり、そしてその名声が今ではドイツ全体にかがやいていた。昔ハスラーがクリストフに与えた約束のことをクリストフは思いだした。おぼれる者がわらをつかむときのような気持ちから彼は、ハスラーのその約束の言葉をたのみの綱にした。ハスラーが自分を救ってくれることができるのだろう！　救ってくれるにちがいない！　彼はハスラーに何を求めようとするのか？　援助でもなく、金でもなく、どんな物質的助力でもない。もしもハスラーが自分を理解してくれないのだったら、ハスラーには何も求めまい。ハスラーもまた自分と同じく世間からの迫害を味わったことのある人だ。ハスラーは自由な精神の人間であった。彼は、ドイツの平凡な精神の遺恨の的になり、打撃の目標にされている、自由な精神の自分を理解してくれるだろう。ハスラーも自分も同じたたかいをしているのだから。

そう思いつくと、すぐさまクリストフは実行に移っ

た。一週間ほど留守をすると母に告げて、さっそくその晩の汽車に乗った。行く先はドイツ北方の大都会であり、ハスラーはその町のカペルマイスター（楽長）であった。クリストフはもうちゅうちょしていることができなかった。蘇生したいためのせっぱつまった努力であった。

*

ハスラーは有名だった。彼の敵対者たちが矛をおさめてしまったわけではなかったが、彼に味方する人々は、彼こそ、現在、過去、未来にわたっての最大音楽家だと叫んでいた。彼は彼を弁護する人々と非難する人々との多数につつまれていたが、どちらの側の人々もおなじように非条理だった。ハスラーは強い性格の人物ではなかったから、非難されればそれを苦に病み、ほめられればいい気になるたちだった。そのくせ彼は、彼の批判家たちに不愉快を与え、非難の大声をたてさせるようなことを、全力をあげてしていた。彼はいたずらをする腕白少年みたいだった。これらのいたずらは多くのばあいに、きわめて悪趣味のものだった。彼のすばらしい音楽天分を用いて、ひどく奇ばつな作品をつくり、もったいぶる人々を怒らせるばかりか、風変わりな台本と、奇きょうな主題と、いかがわしくきわどい場面に対するしつこい好みを持っていて、要するに、健全な気持ちと正常の慎みとに逆らうものならなんでも好きだった。俗衆が憤慨の叫びをたてると彼は満足を感じた。そしてまた俗衆は必ずそんな叫びをたてるのであった。芸術のことにかかわる皇帝自身が成り上がり者たちや貴族たちの高慢なでしゃばりの意見をきいて、ハスラーの名声を公共上の恥辱だと見なし、ハスラーの図太い作品に対して、機会あるごとに侮蔑的な冷淡さを示すことにしていた。ドイツ芸術の最も進歩的な諸党にとってほとんど一つの浄めの式ともなったこんなおごそかな反対のために、憤慨すると同時にまた悦に入っていたハスラーは、ますます無遠慮なやり方をつづけていた。とてつもない新奇な、とっぴな作がつくられるたびごとに、彼の味方はうちょうてんになって、これこそ天才だとはやしたてた。

ハスラーの党派はおもに、文人、画家、そして退廃趣味の批評家たちから成っており、彼らはたしかに、頑迷と国家主義的道学との反動——北ドイツではその脅威が果てしなくあった——に対する反抗の党派を代表する業績を持っていた。しかし彼らの独立性なるものは、やたらに争うことの中にばかり示されて、それがこっけいの観を呈するまでになっていたが、彼ら自身はそれを覚らなかった。というのは、彼らの多数はかなり鋭い才能を持ってはいたけれども、知性を欠いており、さらにそれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

以上に、正しいグー（趣味）を欠いていた。彼らは、彼ら自身がこしらえ上げたわざとらしい雰囲気からもはや出ることができないのであった。そして、すべての文学党派というものがそうであるように、彼らは結局、リアル（真実性）の生に対する感覚をなくしていた。彼らは自分たちのために、そして、彼らの雑誌を読んで、彼らの書くことを鵜呑みにして受け取る数百人のばか正直な人々のために権威をつくり上げていた。彼らのへつらいがハスラーにとってかえって不幸なものになっていた。そのへつらいのためにハスラーは、自堕落にされていたからである。彼の頭に浮かぶどんな音楽的思念をもハスラーは反省もなく取り上げた。そして心の底でこう確信していた――たとえ自分が何か無価値なものを作るにしても、それでもやはり他の作曲家たちよりははるかにすぐれているのだ、と。きわめて多くのばあいこの考えは確かにまちがいではなかったが、しかし、だからといってこの考えが健康なものであり、彼がほんとうの傑作をつくるにふさわしい考えなのだとはいえなかった。究極のところでは、ハスラーは味方をも敵をも全部を軽蔑しきっていた。そしてこのにがい嘲笑的な軽蔑は自分自身へも向けられ、人生全体へ向けられていた。以前には彼が寛容で素朴なことどもをたくさん信じていたその事実に反比例して、今では皮肉な懐疑主義に陥っていた。昔信じていたことどもを、その日その日のおもむろな破壊力に抵抗してまもるだけの力がなかったとともにまた、もう信じていないものを信じているとみずから欺く偽善をも持たなかったので、彼は過去の思い出をはげしく嘲弄した。彼の気質はぶしょうで優柔な南方ドイツ人のそれであり、極端な幸運または不幸、熱さあるいは寒さに抵抗力が弱く、自分の心のつりあいを保つためには温暖の気候を必要とした。知らずしらずのうちに、怠惰に生活を享楽するようになっていた。彼は、上等のごちそう、つよい酒類、無為の散策、優柔な思想を愛していた。流行の趣味に投じている、緊迫力のない彼の音楽のただ中からなおもときどきは、天才的な火花をふき出させるだけ十分な天分をたっぷり持っていたとはいえ、しかし彼の音楽には、今述べたような性質が現われていた。自分の音楽力の退行をだれよりもよく知っているのは彼自身であった。じっさいのところ、それを感じて知っているのは彼ひとりだった。――彼はもちろん自分ではさけたがったまれな瞬間にそう感じるのだった。すると彼は人間ぎらいになり、不きげんになり、利己主義のいろいろな偏見を固執し、健康上の心配に悩まされた。――そして、以前には彼の心に熱意あるいは憎しみをかきたてたすべてのことに対してまったく冷淡になった。

こんな人のところへ、ジャン・クリストフは鼓舞を求めに出かけたのである。彼の目に芸術における独立精神の象徴として映っていたその人の住んでいる都会に、寒い、雨もよいの朝に到着したとき彼の心にはなんたる期待があったことか！　彼はハスラーから、友情と勇気づけとの言葉を期待していた。ほんとうの芸術家ならだれしもが世界にたいして必ずする、効果の見えないたたかいを、一日たりとも力をゆるめず、最後の息の根のあるかぎりはつづけてゆくために、彼は友情と勇気づけの言葉とがどうしてもほしかった。なぜならシラーの言ったとおり――「世間との唯一の関係――それについて絶対に悔やまない唯一の関係――それは敵対関係である」

クリストフは待ちきれない気持ちだったので、駅の近所で手あたり次第に選んだ一軒のホテルに手荷物を置くとすぐに劇場へ駆けつけてハスラーの住所をたずねた。ハスラーは都市の中心から離れた郊外に住んでいた。クリストフは小さなパンをかじりながら電車に乗った。目的地に近づくにつれて心臓がどきどきした。

ハスラーの家のある区域の建物は、新式のドイツが衒学的でわざとらしい野蛮さをそそぎ込んで、それによって天才を発揮しようと熱中している、あのあたらしいふう変わりな様式で建てられていた。無性格な直線の道路をもつ俗っぽい都のまん中にとつじょとして、エジプト式霊廟や、ノールウェー式農家ふうの家や、修道院や稜砦や、万国博覧会の仮り屋や、ずんぐりして足のない、地面にめりこんでいるような、無表情な家々があった。たった一つの大きな目みたいな窓には、獄舎の窓をおもわせるこうしがついていた。潜水艇の入り口のように低い門、鉄製のアーチ、こうしつきの窓のガラス板の上に金文字の数字。玄関の上方に、嘔吐しているような顔つきの怪物たちの像。青い陶器製のタイルがそこにもここにも敷いてある。最も予期しないような場所にもある、アダムとイヴを絵模様にしてある雑色のモザイク。またいろいろな色がわらが不調和に一つの屋根に使われている。最上階に銃眼のような形のぎざぎざのある、城砦じみた家々には、むねの上にみょうな形の動物の像がついている。家の一側面に窓が一つもないかと思うと、それから急に、大きな窓が密接してならんでいる。それが、あるいは正方形だったり長方形だったりで、まるでいろいろな形の傷口みたいである。大きな空白の壁面から一つの重々しいバルコニーが突き出し、それには窓がたった一つしかない。そしてそのバルコニーはニーベルンゲン族のような様子のカリアチード（女像柱）にささえられている。そのバルコニーの石造のらんかんから、あで

ひげのある、髪のふさふさしている二つの老人の頭が突き出ている。ベックリンの描いた半魚半人の老人みたいな装飾彫刻像である。牢獄みたいな感じのこんな建物の一つ――それは一階だけしかない低い家で、入り口にふたりの巨人の裸体像が立っている家であり、古代エジプトの王宮の様式を思わせる――には、破風の壁に、その家の建築家が次のような銘を入れてある――

かつて存在したことがなく、これからも存在しないだろう世界を
そんな芸術家自身の世界を示せ、芸術家よ！
Seine Welt zeige der Künstler
Die niemals war noch jemals sein wird!

ハスラーのことばかりを思いふけっていたクリストフは、ただびっくりして呆然とながめているだけで、理解してみようとはちっともしなかった。さがした家に彼は来ついた。それはカロリンジアン様式の、きわめて飾りけのない構えの家の一つだった。屋内は、ふんだんな、けばけばしい豪奢さであった。階段に漂う空気は、ぞんぶんに暖められている暖房装置のためにむっとするように重かった。小さなエレヴェーターがあったが、ハスラーにいよいよ会うための心の用意をする暇を持ちたかったのでクリストフはわざとそれには乗らず、小きざみに、不安な歩調で心臓をどきどきさせながら、五階まで階段を歩いてのぼった。のぼる途中、彼の心に、昔自分が子供だったときハスラーに会いに行ったあのときのことが思い出されて、幼な心の感激やおじいさんの姿がふたたび回想に浮かんで来たが、そんなすべてのことがつい昨日のことのような気持ちがした。

彼が入り口の呼びりんを押したときは、十一時に近かった。彼を応待したのはひとりのてきぱきした態度の小間使いで、その応待ぶりは、彼を上から下までおうへいにじろじろと見る女中がしらのそれであった。そして彼女はまず最初にはこう言った――「ご主人さまはお疲れでいらっしゃいますからお客さまにお目にかかれますまい」それからクリストフの顔に現われた正直な失望の表情がたしかに彼女をおもしろがらせたらしかった。というのは、彼女はクリストフの様子を無遠慮にすっかり鑑定したあとで、とつじょとにこやかになって、クリストフをハスラーの仕事部屋に案内し、そして言った――ハスラーがクリストフに面会するように彼女が取りはからおう、と。それからクリストフへ好意的な一瞥を投げ、そしてドアを閉めて行った。

室内の壁には二、三枚の印象派の絵と、十八世紀のいきな銅版画が何枚かかかっていた。ハスラーは自分では

あらゆる芸術に精通しているつもりなのであった。ところで、彼がマネとワトーとをいちどきに尊重していたのは、彼を取り巻いている文人連が彼にあたえた示唆に従ってのことであった。それと同じような芸術様式の混雑が家具調度に現われており、非常にみごとなルイ十五世様式の一つの文机が、いわゆる「モダーン芸術」様式のひじかけいす数脚と、そして、多彩なクッションをどっさりおいてある一つの東洋的スタイルの長いすとに取り囲まれていた。どのドアにも鏡がついていた。そして日本の骨董品がいくつものたなに所狭いまでにおいてあり、マントルピースの上にはハスラーの胸像がのっていた。まるテーブルの上には一つの盤の中に婦人声楽家たちや、ハスラーを賛美している婦人たちや、女友たちの写真が、大ざっぱに積み重ねて入れてあり、それらの写真には、聰明な献辞や熱烈な献辞が書いてあった。文机の上はおどろくばかり雑然としていた。ピアノはふたをあけたままであった。たなの板にはほこりが積んでいた。半ばすいさしの火の消えている葉巻きたばこがあちこちにおき捨ててあった……

隣室で、しかるように話している不きげんな声がクリストフの耳にもきこえてきた。小間使いのかん高い声が返事をしていた。ハスラーは姿を見せることに気がすすんでいないことがクリストフによくわかった。だがそれと同じ程度にはっきりと、小間使いは、ハスラーをどうしてもクリストフに面会させようと決心してかかっていた。そして主人に向かって無遠慮に大胆ななれなれしい調子で返答をする、そのかん高い声が壁越しにクリストフにきこえてきた。彼女が主人に言っている言葉の内容を聞いてクリストフはぎごちない気持ちになった。しかし主人のハスラーはべつになんとも思っていないどころか、小間使いの、客にたいする無礼な考えをかえっておもしろがってさえいるらしかった。そしてぶつぶつ叱言を言いつづけながらも、小間使いをちゃかすようなことを言ってますます相手をけしかけておもしろがっていた。とうとうクリストフはドアの開く音を聞いた。そして、ふしょうぶしょうの歩き方で出て来ながらなおも叱言とひやかしとを言いつづけているハスラーの声を聞いた。

彼がはいって来た。クリストフは心臓をしめつけられる気持ちだった。クリストフは昔会ったことのあるハスラーの姿をふたたび見た。だがなんという変わりようだろう！　これは確かにハスラーでありながら、どうしてもそうとは思えないのだった。依然として彼はしわのない広いひたいをもち、子供みたいにしわのない顔をしていた。しかし頭がはげ、でっぷりふとり、顔色が黄色くなり、眠たそうな様子で、下くちびるがややたるんで、

口もとに味気なさそうな不満そうな表情が浮かんでいる。両肩をすくめ、両手を、形のくずれている上着のポケットにつっこんだままで、足にはつかい古したうわぐつをつっかけている。ちゃんとボタンをかけてさえいないズボンの上方で、シャツがふくれあがった形になっている。彼はぼんやりした目つきでクリストフを見つめた。その目つきは、若者が自分の名を口ごもりながら名乗ったときにも輝かなかった。黙って機械的にあいさつをし、そしてクリストフに、顔の動きによって、すわれと合図した。そして吐息を一つついてどかりと長いすに腰をおろして、からだのまわりにたくさんのクッションを置いた。クリストフはもう一度くりかえして——

「わたくしは以前に一度……お目にかかれる名誉をもちましたクリストフ・クラフトです……」

ハスラーは長いすの中にからだをうずめたままで動かなかった。彼の長い足は組み合わされていた。やせている両手は、あごのあたりまであげられている右ひざの上で組み合わされていた。彼は答えた——

「思い出せませんね」

クリストフはのどをふさがれる思いがしながら、以前の出会いをハスラーに思い出させようとした。どんなよぎない事情のもとであれ、そんなに個人的な思い出について口に出すことはクリストフにはせつなかった。今ここで、そのことは彼にとって責め苦となった。言葉がすらすら出なかった。どう言えばいいのかと、言葉をさがしてとまどった。思わずとんまなことを言って、そのために顔があかくなった。ハスラーはクリストフがどもりどもり言いつづけるままにさせておいて、ばくぜんとして冷淡な目つきで彼を見つめていた。クリストフが言い終わってもハスラーはまだやはり一瞬間はひざを揺すりつづけながら黙りこんでいるばかりで、クリストフがさらに話しつづけるのを待ち受けている様子だった。それからハスラーは言った——

「そう……しかしだからといってわれわれはもう一度若くなることができない……」

そして背伸びをした。

あくびをした後に彼は言い添えた——

「……ごかんべんを願わねばならない……わたしはよく眠っていないのです……昨夜は劇場で宴会があって……」

そう言ってまたあくびをした。

クリストフは、自分が今ハスラーに話したことをハスラーが話題にして取りあげてくれるのを期待していた。しかし万事そんな話題には興味をなくしてしまっているハスラーは、それについてはなんにも言わなかった。そしてクリストフ自身のことについては一言も問わなかっ

た。しきりにあくびをくりかえした後に、彼はクリストフにはたずねた——

「もうながいあいだベルリンにおられるのですか？」

「けさ着いたばかりです」とクリストフは答えた。

「そう」とハスラーは、意外なことは何もないというふうで言った——「どこのホテルにお泊まりですか？」

それにたいするクリストフの返答に注意を払う様子もなく、たいぎそうにからだを起こして呼びりんの方に手を伸ばしてそれを鳴らした。

「ちょっと失礼……」と彼は言った。

小間使いが例のおうへいな顔つきで現われた。

「キティー」と彼は言った——「きょうはわしに昼飯を食べさせないつもりかね？」

「でも」と彼女が言った——「訪問のお方がいらっしゃるところにお食事を持ってまいるわけにもまいりませんので」

「いいじゃないか」とハスラーは、あざけりのまばたきをクリストフに向けながら——「このかたはわしに精神のかてを与えてくださっている。わしはからだの方にもかてを与えようと思う」

「お客さまの前で食事をなさって、動物園の中の動物みたいにお見えなさるのはみっともよくございませんわ」

ハスラーは腹を立てず、笑い声をたて、その言葉を訂正した——

「飼いならされている動物みたいに……」

「いいからここに持って来ておくれ」と彼は言った——「わしはみっともなさもいっしょに食べてしまうだろう」

女は肩をぴくりとうごかして去った。

クリストフの仕事のことについてハスラーが依然なんにも聞き知ろうとしないので、クリストフは話をつづけようとした。地方で生活することのむつかしさ、人々の凡庸さ、彼らの雅量の乏しさ、自分の現在の孤独について彼は話した。自分の精神的な悩みについてハスラーに関心を持ってもらおうとクリストフは努めた。しかしハスラーは安楽いすの中にからだを沈めて頭をクッションにもたせかけ、目を半ば閉じて、クリストフに話させながら、それに注意を払ってはいないらしかった。それから瞬間的に目を見ひらいて皮肉な短い言葉を投げた。だがそれらは地方の人々にたいするおどけた皮肉であり、その皮肉はクリストフのいっそうちとけて話そうとする試みをぴたりとさえぎった。——キティーは、昼食のぜんをもってふたたび現われた。コーヒー、バター、ハムなど。彼女は不きげんそうな表情でそれを机の上の、ちらけている紙類のあいだにおいた。クリストフは言いつづけるのが気楽ではない、悩みにみちたうちあけ話をさらにつづけるために、小間使いがふたたび行ってしま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo